ISSN 0285-0117
筑波大学附属図書館報　2002年6月
THE UNIVERSITY OF TSUKUBA LIBRARY BULLETIN
つくばねvol.28no.1

● 目次

1　脇道へ逸れる愉しみ
4　冊子体SCI，SSCIおよびA&HCIから
オンラインWeb of Scienceへ
6　本学教官寄贈著書紹介
8　Ask Us　としょかんミニガイド
10　平成13年度附属図書館統計
11　私の一冊
12　掲示板

脇道へ逸れる愉しみ　～ある教育書編集者のこと～

山内　芳文

中央図書館の一階には，本学の前身校が営々として蓄積してきた貴重な書物が所蔵されている。これらの蔵書は，かつての東京教育大学の時代には，図書館本館，学科図書室，さらに教官研究室などに分散していたものだが，現在ではここに集中して配架されている。なかでも，教育学関係のコレクションは，国内はもとより，世界でも屈指の規模と内容であることは広く認められている。私は，昭和63年４月に教育学系に来任して以来，ここを訪れることを無上の愉しみとしてきており，そしてことにこれまで見たこともない書物に出会ったときなどには言いようのない感激に浸ったものだ。図らずも附属図書館長に併任された昨年の４月以降も，多忙な学務の合間をぬって，この「宝の山」を訪ねることに何とも言えない至福のひとときを見いだしてきた。

カール・ケールバッハという人物は，私の専門である教育学や教育史の世界でもごくごく一部でしか知られていない。そして，彼の名はどのような人名辞典にも載っていない。私にしても，関連の学界，しかもそのごく一部で共有されている以上の情報はこれまでもってはいなかった。つまり，大学院に進学する今から35年以上もまえのころ，Monumenta Germaniae Paedagogica（『ドイツ教育学の記念物』とでも訳すしかない；以下，MGPと記す）という60巻を超える膨大な教育史叢書の企画者で編集者，そして浩瀚なヘルバルト全集の編集者としてのケールバッハを知って以来，ずっとその程度の知識でしかなかった。ところが，このほど秋の学会で久しぶりに発表でもしてみようなどと思い立ち，中央図書館の一階を訪ね，関連の資料にあたっていたところ，大学院でヘルバルトの講読をやっていることもあってのことだろうか，発表テーマとは当面無関係なケールバッハのことにふと想いが及び，すこしばかり脇道に逸れて，彼のことを調べてみようかという気になった。

ケールバッハ（Karl Kehrbach）は1846年８月22日，イエナやハレといった古い大学町を貫流するザーレ川の支流オルラ川の畔，チューリンゲンの森の小さな町ノイシュタットに生まれた。しかし，1874年の夏学期の始め（４月）に，ザクセンの大都会ライプチヒに出て，ヘルバルト派の教育学者チラーが主宰する大学の教育学ゼミナールに

入るまでの彼の経歴は，現在のところ十分に把握できていない。いずれにしても，現在の私の関心は，なぜMGPとヘルバルト全集という奇妙な取り合わせがケールバッハにおいて結実したのかということにあり，彼がライプチヒに現れるまでの経歴についての調査は別の機会に譲らざるをえない。ただ，それ以前のケールバッハが民衆学校（小学校）の教師であり，大学での研修の機会をこのチラーの施設に求めたことだけははっきりとしている。チラーのこのゼミナールにはすでに1871年からシュトリュンペルも参加し，それはあたかもヘルバルト派のセンターの様相を呈していた。チラーのゼミナールでのケールバッハの主要なテーマは，アーサー王の伝説，円卓の騎士たちの愛と勇気の物語の教材化の問題で，これについてはいくつかのレポートの記録が残されている。このライプチヒの教育学ゼミナールには実験学級が付設されていたから，ケールバッハはそこでの授業も担当したことだろう。さらに中世のドイツやフランスでの伝承の世界に関心を傾斜させていったことははっきりとしているが，しかしながら，それ以上の詳しいことについてはほとんどわかっていない。ケーニヒスベルクのヘルバルトに端を発する教育学ゼミナールの系譜においては古代や中世の伝説や伝承が主要な教材となっていたことからすると，それはごく当然の選択だったのかもしれない。そもそも，ヘルバルトの教育学にとっては，勇気，友情，さらには誠実といった永遠な有徳の世界を提供する古代ギリシアの神話，ことにホーマーの文学が格別の意味をもっていたからだ。ケールバッハにとってのひとつの転機は，道徳の宗教に対する関係に関する懸賞問題でカントをとりあげたことで，それが彼の関心を形而上学の問題へと移行させ，やがてその文献考証，そしてその編集の面白さへと繋げていった。レクラム文庫の学生版カント選集は，1877年に『純粋理性批判』の刊行で，ベンノ・エルドマンとの小競り合いが生じはしたものの，そのことによってか，彼のエディターとしての名はかえって広まったといってもよい。現在インターネットでの図書検索では，ケールバッハは，まずこのカント選集，そして今日では復刻版で普及しているヘルバルト全集の編集者として確実にヒットする。

ヘルバルトがカントの実質的な後任として，ロシアに近い東プロイセンのケーニヒスベルクの大学へと赴いた翌年の1810年から経営し始めた「教授学練習所」（「教育学ゼミナール」への改組は1818年），それを源流とするライプチヒのチラーのゼミナールに参加していたケールバッハがヘルバルトに関心をもったとしても，そのこと自体何ら不思議なことではない。ケールバッハがそれまでの定版だったハルテンシュタイン（1850年以降）やヴィルマン（1873年以降）といった教授たちの編集する選集への不満からヘルバルト全集の編纂に着手したのは早くとも1877年以降のことだが，ヘルバルト他界の翌年（1842年）に旧友シュミットによって書かれた「回想」を冒頭に収めた第１巻，そして有名な『一般教育学』を収める第２巻の刊行はその10年後の1887年，ライプチヒから遠く西へ離れたランゲンザルツァの書肆ヘルマン・バイヤーからだった。彼自身の手になる最終（第10）巻の刊行に漕ぎ着けたのは編纂に乗り出してから実に25年後の1902年のことで，それにはヘルバルトの1831年から1836年にかけての論攷，ことに有名な『教育学講義綱要』の1835年の初版と1841年ヘルバルト没年の版，それに『自然法と道徳の分析的解明』などが収載されている。そして，これまでに出版された９巻にはそれまでの諸版では見落とされてきたいくつもの重要な論攷が収められている。しかしながら，ヘルバルトがケーニヒスベルクで行った教育活動，つまり地方教育評議会，さらには大学の（とはいっても，その経費のほとんどはヘルバルト自身の負担だったのだが）教育学ゼミナールの活動についての文書，そして何よりも書簡の類の整理は，著作の最終（第11）巻の刊行（1906年）とともに協力者のフリューゲルらの手に委ねられなければならなかった。ケールバッハ自身は第１巻の編集者序言で，書評や書簡，さらには行政文書まで収録するとの計画を披瀝している。牧師だったフリューゲルは，

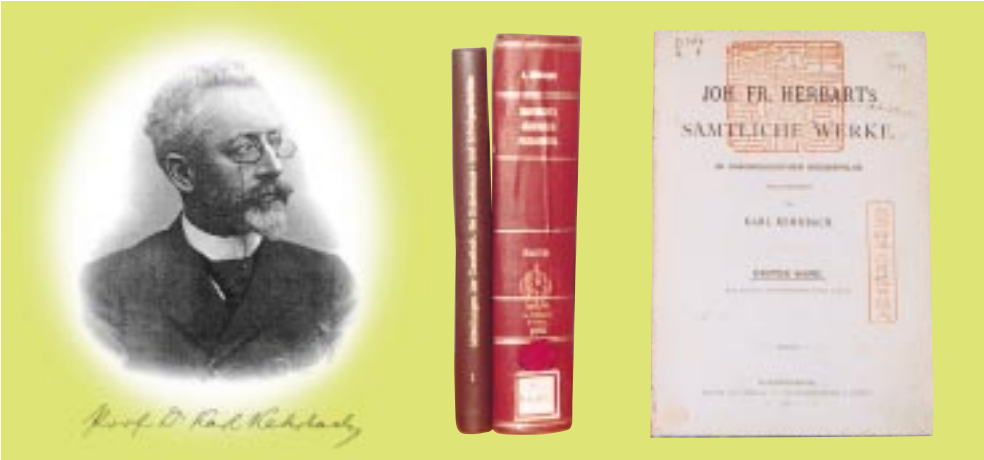
「ヘルバルトの最良の理解者」などと呼ばれている。彼によって編集が継続された書評や書簡，そして行政文書まで収録（８巻分）されたヘルバルト全集（全19巻）の完結は1912年だった。なお，ケールバッハは，教育学ゼミナールについては格別の関心をもっていたと思われ，すでに1893年秋ウィーンで開催された第42回ギュムナジウム教師会議でそれについての講演を行っている。これはただちに活字にされているので，そこからは今日でも教育ゼミナール経営者としてのヘルバルトへの彼の並々ならぬ関心が看て取れ，またその描写においては周到に資料的な吟味が加えられていることを窺い知ることができる。

一方，MGPの編纂については，ライプチヒの教育学ゼミナールのパトロンでもあったトマス・シューレ（大作曲家バッハで有名な聖トマス教会に付設されている当時のエリート校）の校長フリートリヒ・アウクスト・エックシュタイン，彼はこれも教育史の世界では有名なシュミットの『教育制度百科事典』（1858年以降）の第４巻でラテン語教授の変遷についての項目を，その小さな活字からしても本来ならばゆうに一冊以上の書物となる200ページにわたって担当しているが，そのエックシュタインが個人的に収集していた教育の膨大な史料を所蔵していることはよく知られていた。教育史の史料の系統的な収集の必要性は1871年11月16日ライプチヒの教員組合のコメニウス没後200年記念の集会でユリウス・ベーガーが提案して以来，ことにライプチヒでは教育史の中央資料館を設立しようという動きが活発となっていた。後にMGPに貴重な史料群を提供し，その紹介者ともなるコルデヴァイの1878年の東部ドイツのゲラでのギュムナジウム教師会議における熱心な史料整理の必要性についての提案は，そのベーガーに触発されてのことだったし，そこではエックシュタインの『教育制度百科事典』への掲載論攷が原史料の周到な吟味にもとづいて書かれている偉大な業績との讃辞も表明されていた。コルデヴァイの提案とエックシュタインとの出会いは1879年の西部ドイツのトリアでのギュムナジウム教師会議におけるエックシュタインの賛意となって表され，それはいくつかの曲折を経て，ケールバッハが戻る1884年の末までにはライプチヒにコメニウスの名を冠した教育資料館が設立されることになる。そのまえに，つまり少なくともその1884年，つまりこれより100年まえに汎愛学院が誕生したデッサウでのギュムナジウム教師会議までにケールバッハがMGPの構想をもってベルリンへ出向き，そこでホフマンという出版者と出会って援助の約束を取り付けていることがわかっている。エックシュタインは，自らの出席が最後となったその会議で，「Monumenta Germaniae Historicaの誇り高き響きを彷彿とさせるものだ」としてMGPの構想を賞賛している。Monumenta Germaniae Historicaは，ウィーン会議の直後，プロイセン改革の立て役者フォン・シュタイン男爵によって提唱され，その刊行が企画され，1826年にその第１巻が刊行されたドイツ中世史の史料集大成のことで，19世紀の末になってもその事業は継続していた。ケールバッハがこれ以降も相当の時間をかけてMGPの構想を練り直していたことは，すでに第１巻の刊行をみている1887年の秋スイスのチューリヒで開かれたギュムナジウム教師会議で「MGPの総括的な計画について」と題する講演を行っていることにも示されている。

1886年にコルデヴァイの編集によるその第１巻『1251年から1828年までのブラウンシュヴァイク市学校規程』がベルリンの書肆ホフマンから刊行されて以来，ケールバッハがベルリン近郊のシャルロッテンブルクで世を去る1905年10月21日までの間に計33巻が送り出され，最終的には大戦前夜の1938年までにMGP全体で62巻の刊行をみた。その全容を紹介するには残された紙幅が到底許さないが，例えば彼の生前にはパハトラーによるイエズス会の教育規程（ラチオ・ストゥディオルム）の羅独対訳（５，９，16巻）やハルトフェルダーによるメランヒトンについての今日期待できる唯一の体系的な研究（７巻），さらには17世紀末からのドイツにおけるコメニウス教育学の影響を扱ったチェコ出身のクヴァチャラによる資料紹介と

その分析（26，32巻）などが刊行されているが，企画者で全体の編集者でもある彼が担当している巻は勿論ひとつもない。その没後には，高等学務委員会を舞台とする18世紀末のプロイセン中等教育政策の展開と大学入学試験の導入を扱ったシュヴァルツの論攷（46，48，50巻など）やフリードリヒ大王の教育政策をまとめたフォルマーの力作（56巻，彼には別にその父フリードリヒ・ヴィルヘルムⅠ世の教育政策を扱った著書もある）なども刊行されている。最終の第62巻は，ティーレの「プロイセン教育制度史」だった。彼は，フンボルト（W.v.）の片腕であるジュフェルンの「教育法案」（1819年）の全文紹介者として知られている。MGP各巻の担当者の多くがギュムナジウムの教師だったことは，このさい注目しておいてよい。MGPの刊行開始からしばらく経った1890年，プロイセンでは「学校会議」が開催され，皇帝ヴィルヘルムⅡ世の愛国心高揚の演説が教育界を酔わせていたが，ケールバッハは，その1890年に「ドイツ教育史協会」を設立し，協会の「会報」（Mitteilungen）を発行している。その「会報」は，彼の他界から５年後の1910年からは教育史の「雑誌」（Zeitschrift）と改称して，その刊行はMGPと同じ1938年まで継続した。その両者には多くの興味ある論攷や記事が掲載されているが，1905年末刊行の「会報」の第15巻第４号には，この直前に59才で世を去ったその創刊者の肖像，そして追悼と回想の記事が掲載されている。

（やまうち・よしふみ　教育学系教授／附属図書館長）



冊子体SCI，SSCIおよびA&HCIからオンラインWeb of Scienceへ

白岩　善博

Web of Science!

文部科学省の21世紀COEプログラムの申請書類の中で，「過去５年間の論文の引用率」の記載が求められるとの情報があり，本学でも各組織においてそのデータづくりのために，筑波大学電子図書館に収められているこのWeb of Scienceの恩恵に預かった方が多いのではないでしょうか。そのため４月末にはアクセス制限がかかる程であったようである。

ちょうど１年前の６月に「Web of Scienceの無料トライヤル」が実施され，それを経てその導入についての議論が研究図書委員会においてなされた。私見ではあるが，利用結果のアンケートからは思った程の反響は感じられなかった記憶がある。年々増大する学術雑誌価格の高騰やオンラインジャーナル化の流れの中で，二次資料への費用負担は各学系にとっては悩みの種であることは現在も変わりがない。今般の多くの利用をみると，この導入は正に時宜を得た先見の明のある判断であったと思われる。多くの困難を乗り越えてこの